カルーア　ハッピーライフ！3――サンプル――

悪阻（嘔吐）・オムツ・尿パッド・勃起練習・素股・精液乳首塗り・タマ潰し

※安西がドMを発揮します。

「うえええ」
気持ち悪い。
「ううううっ」
「苦しいな……」
篠崎の大きな手が背中を撫でる。悪阻中じゃなければ眠ってしまうくらい落ち着くのに。
「ううううっ！」
繰り返す嘔吐。朝から晩までずっと嘔吐。それでも氷で水分が摂れると分かっただけまだマシなのかもしれない。
「うう……」
「諒、ほら」
嘔吐が落ち着いたタイミングで渡されるコップ。挿されたストローを使って水を口に含み、ぐちゅぐちゅと口内で動かしてから手の中の洗面器に吐き出す。ちゃんとビニール袋は掛けられているけれど、これを処理させるのは申し訳ないな、と罪悪感が募る。でも今は篠崎に甘えるしかない。
「すみません……」
「いや、苦しかったな。頑張ったな」
洗面器を篠崎に渡し、涙を拭いて鼻をかむ。
「せっかくゼリー……」
「気にするな。また食べられそうだと思ったら食べてみような」
ようやく食べられるようになったゼリー。なのに時間を置いて催した嘔吐でそのほとんどを吐いてしまった。
「でも……」
「諒、前は水だって飲んだ瞬間戻していただろう？　ゼリーを食べてからもう二時間は経っているよ。それだけ胃に入れておけたんだ。少しは消化もされていたかもしれない」
「……はい……」
そうだ、そう思うしかない。でもせっかく篠崎が凍らせて、適度に解凍までしてくれたゼリーだったのだ。ゼリーが食べたいと言ったときの嬉しそうな顔を思うと悲しくて切ない。
「大丈夫。さあ、氷を舐めてみようか。今は味がないものの方がいいかな」
篠崎の明るい励ましが少しだけ心を軽くする。

「ン……お水の氷……」
「すぐに持ってくるよ。横になれるかな」
蹲っていた身体をゆっくりと伸ばし、それから仰向けに寝転がる。今は少しの衝撃も怖い。小さなきっかけで嘔吐してしまいそうで。
「いいこだ……上手にできたな。すぐに戻るよ」
吐瀉物の片付け、それから氷。篠崎はずっと付きっきりで世話をしてくれるけれど嫌にならないのだろうか。
（迷惑ばかり掛けてる……）
でも謝罪すると「二人の子だろう」と篠崎は悲しそうな顔をするのだ。それに「諒にばかり負担を」とも言う。確かに体調不良はつらいけれど、世話だって大変だ。突然の嘔吐では洗面器が間に合わないことだってある。そしたらシーツも洗濯だし、ベッドメイクもやり直しになってしまう。
（いつ終わるのかな……）
買ってもらって読んだ雑誌には人それぞれだと書かれていた。けれどだいたい十六週辺りには終わることが多いとも。
安西は今、八～九週だと聞いている。ということはあと二か月くらい吐き気が続くということだ。
（しんど……）
そう思うとさすがにきつい。たった一週間ちょっとでここまでぐったりしているのだ。本当に乗り切れるのだろうか。それに場合によっては出産まで続くこともあるという。もうそうなったら自分の力で産めるのかどうかすら怪しい気がする。
（というか、身がもたないかも……）
一人の時間、特に嘔吐したときとその後は暗い考えばかりが頭に浮かぶ。でもどうしても悪阻の終わりを考えるとそうなってしまうのだ。
「諒、お待たせ」
「あ……」
篠崎が傍にいてくれると心が落ち着く。吐き気まで落ち着くわけではないけれど、それでも安心感が全く違うのだ。
「ほら、口を開けて」
言われた通りにすると、冷たい氷が口の中に転がった。
「美味しい？」
「ん」
冷たいものを美味しいと思える。口に入った瞬間に嘔吐するわけではない。
そうやって何かいいことを思い浮かべていくしか乗り切る術はない。
「じゃあ、続きを観ようか」
今観ているのは海外ドラマだ。日本でもとても人気があったシリーズもの。裏切り者が誰なの

か、犯人や目的は何なのか、というのを考えながら観ると、不思議と時間が早く経つ。
「はい」
口の中でもごもごと氷を転がしながら天井に映る映像を二人で見上げる。
「……篠崎」
「ん？」
「いつか、こうやって寝転んで星を見たいです」
「あぁ、そうだな。悪阻が終わって暖かくなったら見に行こう」
「……終わるかな」
「え？」
「悪阻……本当に終わるんでしょうか」
「諒……」
動きを止めた天井。隣を見ると篠崎がこちらを向いていた。
「諒……何もできなくて本当にすまないと思っている」
「え……？」
「俺が諒をつらくさせている」
「なに……」
何を言っているのだろう。篠崎は助けてくれるばかりで安西をつらくさせたことなんて一度もないのに。
「妊娠させたのは俺だろう」
「あ……」
そういう意味だったのか。それなら確かに篠崎のせいとも言えるかもしれないけれど、それは本当は篠崎の「せい」ではない。篠崎のおかげで子供ができたのだ。
「篠崎のせいじゃないです……」
「何？」
険しい声。誤解だ。
「いえ、赤ちゃんのパパは篠崎ですけど。でもその、篠崎のおかげで赤ちゃんがいるんです」
「……だが悪阻を起こさせたのは俺だ」
「それは……でもみんな通る道ですよ」
篠崎が自分を責めることではない。それをどうにか分かってほしかった。
「もしそれが篠崎のせいなら、赤ちゃんは自分が悪いってことになっちゃいます。自分のせいで悪阻がって」
「……そうだな……」
「仕方のないことです。それに今つらければ、産まれたときの感動も大きいかもしれません」
「……すまない」
切なそうな声。搾り出したような、苦しそうな。篠崎がそんな風に思う必要はないのだけれど、そこまで真剣に考えてくれているのだと思うとこの人でよかったな、と思える。

「あ」
「ん？」
空気を変えたかった。そのために発した音。けれど篠崎はしっかりと反応してくれるので、何か言葉を続けなくてはならない。
「ええと、かき氷器、あるの分かります？」
「かき氷器？　あるのは知ってるが」
「ええと、キッチンの棚にあるんですけど……りんごジュースの氷、削ってもらってもいいですか」
まるで篠崎を使うみたいだけれど、罪悪感に苛まれているなら頼みごとをされた方が気は楽かもしれない――と自分に都合の良い解釈。
「あぁ、食べられそうかな。すぐにやってくるよ」
そう言って篠崎はプロジェクターのスイッチを入れて寝室を出て行った。再び動き出す天井。主人公が車を運転している。
（そう言えば、これって本当には動いてないんだよな……）
気を緩めると嘔吐してしまいそうで、必死に思考を働かせる。何でもいい。どうでもいいことでかまわないから考えていたい。
（確か、スタジオに置いた車で……周囲はライトを流しているんだっけ……）
遠い昔に観た映画のメイキングシーン。何の映画だったかさえ覚えていないのに、ＤＶＤの特典映像として入っていたメイキングシーンの方が印象に残っている。
（すごいよなぁ……）
まるで本当に道を走っているように見える。そう見えるように撮っているのだから当然なのだけれど、たった数十秒のシーンに何時間も掛けるというのがすごい。撮影だけで数時間ということは、スタジオの準備をしているスタッフは一体何時間掛けているのだろう。
「諒くん」
「あ、篠崎」
「大丈夫かな」
「はい、ドラマに夢中になっていました」
「それは……邪魔をしたな」
「まさか」
篠崎に声を掛けられて邪魔だと思うはずがない。それにかき氷にしてほしいと頼んだのは安西の方だ。
「少し起こそうか。動かしても大丈夫か」
「はい」
止められるドラマ。そしてゆっくりと起き上がっていくベッド。まるで本当に介護されているみたいだ。
「ほら」

差し出されたスプーンにはもう削られた氷が載っている。
「あ」
口を開け、篠崎を見るとそっとスプーンが差し込まれた。
「美味しい……」
これはちょっと発見かもしれない。そもそもこうなるまでリンゴジュースを凍らせたことがなかったのだけれど、舐めても美味しいのに削ったらもっと美味しいなんて。産後もおやつにして食べたい。
「そうか、よかった」
それに篠崎のほっとした表情が見られるのも嬉しい。
「もっとください」
「ああ、もちろん」
差し出されるスプーンを咥え、口の中で溶かしてから飲み込む。一口ずつが少ないので溶けたジュースはさらに減った。それでも十分美味しいと思える。
「最後の一口だよ」
「もう？」
「一気に飲むのはよくないよ。また少し時間が経ってからにしような」
元気なときなら欲しいだけくれていただろう。ダメなことはダメと言ってくれる優しさが嬉しい。
「はぁい」
いいこと言われたくて素直に頷き、希望通りの言葉と手の感触を味わった。
「さあ、少し眠ろうか」
「うーん……」
眠気はない。けれど確かに眠ってしまえば嘔吐を忘れることはできる。
「続きがいいかな」
篠崎が天井を指差した。続き。気になる。
「続きがいいです。でも手を繋いでいてくれますか」
そしたらもしかしたら観ながら眠くなって寝てしまえるかもしれない。篠崎にも甘えられるし触れられる。それって最高かもしれない。
「あぁ。腕枕は？」
「……してほしいけど、でも続きが気になるので」
つまり、寝ちゃうのだ。もしくは甘えたくて、意識がドラマから篠崎に移ってしまう。そしたらストーリーが分からなくなってしまうし、かと言って止めさせるのも篠崎に申し訳ない。
「分かったよ。じゃあ眠くなったらそのまま寝ような」
「篠崎も寝ますか」
「そうだな……俺も寝るよ。同じ頃に寝たら夜眠れなくても一緒に起きていられるだろう」
「……それって不健康」

「そうか？　俺は昼夜逆転しても諒と同じ時間で生活したいよ」
「……恥ずかしい」
すごく恥ずかしい。いや、世話をしている以上どうしても生活ペースを合わせる必要があるということなのだろうけれど、そういう言い方をされると――。
「可愛いな。言葉だけで恥ずかしくなるのか」
「……もう……ほら、再生してください」
「つれないな」
そう言いながら篠崎は決して手を出そうとはしない。そういえば自分でしているのだろうか。気になるけれど、訊けない。申し訳なくて。
「これ、面白いな」
「米国のドラマですよね。観てなかったんですか」
「観てないな。テレビを観る習慣がそもそもなかった」
「え、なんか意外です。あ、でもテレビより映画っぽいイメージですけど」
「まぁ映画はたまには観たが、一番印象に残っているのは妖怪映画だな」

〜〜〜〜

「退院おめでとうございます」
「お世話になりました」
「ありがとうございました」
入院期間は一週間だった。だいぶ体力は落ちているけれど、退院の二日前から点滴を減らしてみたところ、なんと吐き気が落ち着いていたのだ。と言っても完全に治まったわけではなかったけれど、入院前のようにほとんど何も食べられず、胃を動かせず――というほどではない。何度か嘔吐はしてしまうけれどそれでも食べることができるようになった。
「もしかしたら食べ悪阻になっていくかもしれません。そのときは満腹にならない程度にこまめに食べるようにしてくださいね」
「はい」
悪阻の種類がたくさんあることも、ずっと同じではなく変化する場合があることも入院中に教えてもらった。それから、産道マッサージについても。
「さあ、帰ろう」

「あー……やっぱり家っていいなぁ……」
「疲れただろう。ベッドに入ろう」
「はい」
病院から移動しただけで安西は特に何もしていない。手続きも荷物の片付けも全て篠崎がしてくれたのだ。けれどやはり移動が疲れたのか、それともほっとしたからなのか、身体が重いよう

な気がした。
「少し寝て、体調が良さそうなら久しぶりに湯船に浸かろうか」
「わ！　はい！」
病院ではシャワーだけだった。病室が暖かいので風邪をひくことはなかったけれど、やはり湯船に浸かりたい。
「ほら、じゃあパジャマに着替えような。オムツはどうしようか」
「あ……」
結局病院では元気だったのでトイレに行っていた。最初は篠崎に抱っこで連れて行ってもらったけれど体調が回復してから自分でゆっくりと歩いて行った。排便もできたので、それで良かったと思うのだけれど――。
「……えと……」
「俺はどちらでもかまわないよ。動くのも大事だし、オムツも可愛い」
どうしよう。歩く必要性は分かっている。けれど入院前のあのお世話の時間が恋しいとも思っている。
「……あの……」
「あぁ、やはり尿パッドとオムツをしてもいいかな」
「え？」
「たくさん買ってあるし、何より諒くんの可愛いところが見たい」
「……ゃ」
悩んでいる――いや、尿パッドとオムツがいい。そう思っていた心を読んだ上で言ってくれている。それが逆に恥ずかしい。
「自分でトイレ行く……から……」
本音じゃない。強引にされたい被虐趣味の表れだ。
「ダメだよ。一週間も我慢したんだ。可愛いところをたくさん見せてくれ」
「ゃ、ぁっ！」
ズボンの前立てを撫でられるとぞくりとする。でもやはり、ペニスは起たない。
「篠崎……」
「ん？」
「勃起しない……です……」
「ゆっくり練習しようと言っただろう」
「あ……」
（もしかして……）
そのためにオムツを選んだのだろうか。安西の心を読んだのではなく――いや、ある意味読まれているけれど――単に興奮させやすいからとオムツを。
「尿パッドをおちんちんに巻いて、それからオムツもして。それで抱っこして過ごそうか」
「ゃぁ……」

想像するだけで興奮する。でもやはり心が興奮してもペニスはピクリとも揺れない。
「大丈夫、諒くんはちゃんとまた勃起できるし、おちんちんで射精もできるよ」
「ン……」
「それに産道も拡げないとな」
「ぁ……」
産道を拡げる方法。三島曰く、女性器と同じように感じれば濡れてくるらしい。でも最初はなかなかうまくいかないので肌に優しいローションを使って指一本から。それをできれば毎日して、可能な限り拡げる――らしい。
「あの、どのくらい……拡げるんですか」
「明言はしていなかったが、子供の頭が通るくらいだろう」
「う……」
そう言われると怖い。だって子供の頭なんて十センチくらいあるんじゃないだろうか。
「指が入るようになったら器具を買おう」
「器具？」
妊夫用の産道拡張セットでも売っているのだろうか。
「ディルドかな」

〜〜〜〜

「だってっ、あっ、あっ」
会陰部分に産道があるからか、篠崎はそちらに触れぬよう小刻みに動かしていた。だから余計に気持ちいいところばかりを狙われてしまう。
「お話して」
「ぁっ、だってっ、あっ！　だめっ」
こんなに気持ちいいのに勃起できないということは、きっとペニスに不具合が生じているのだろう。でも頭はもうイくことしか考えられない。勃起もしていないというのに。
「ほら、諒くん」
「あっ、あっ、なにっ」
一体何の話をしていたんだったか。体重を掛け、タマを潰すように力を入れてゴリゴリされると頭が真っ白になってしまう。
ふ、と小さく笑いが聞こえた。篠崎を見ると嬉しそうな顔をしている。
（なんで……？）
「可愛い。気持ちいいのに夢中でもう忘れてしまったのか」
「っ……ごめ……」
「いいよ。大丈夫。気持ちいいな。どうしたら気持ちいい？」
「んっあ、やっ、やだっ」

篠崎が腰の動きを止めてしまった。もどかしい。もっとゴリゴリしてほしいのに。
「やだ、して、篠崎っ」
「うん？　どうしてほしい？」
「ぁ……」
きっと言わないと動いてもらえない。久しぶりの行為なのに中断なんて嫌だ。
「……ゴリゴリ……」
「ゴリゴリ？」
篠崎ならきっと分かっているはずだ。けれど今日は言わないとダメらしい。
「……あの、えと……タマタマ……潰してゴリゴリしてほしい……です」
目をぎゅっと瞑って言った。それでも恥ずかしくて顔も背ける。あぁ、ここにテディがいたらお腹に顔を埋めて隠せるのに、なんて思いながら。
「痛くないのかな」
「いた……痛い……けど……それが気持ちいい……」
こんなの恥ずかしすぎる。でも、ちゃんと言えばしてくれるともう知っている。
「そうか。諒くんは恥ずかしいのも痛いのも気持ちいいんだな」
「んっ、早くっ……」
羞恥心を押し殺して言葉にしたのだから早く叶えてほしい。早くタマを篠崎のペニスで潰してほしい。
「でもさっきのがまだ聞けてないな」
「え……？」
さっきの、とは一体何のことだろう。ちゃんと、どうされると気持ちいいのかは伝えたはずなのに。
「さっき、太ももに力を入れただろう？　それはどうしてかな」
「あっ……」
そうだ。そうだった。それを訊かれていたんだった。
「……篠崎に気持ち良くなってほしくて……」
「そうか。じゃあ俺だけ気持ち良くさせてもらおうかな」
「えっ、や、やだっ！」
気持ち良くなってほしいけれど自分も気持ち良くなりたい。一緒に気持ち良くなりたい。
「だが勃起できなくても……タマタマだけで気持ち良くなれるかな」
「なれる……」
こんな暴露は恥ずかしい。でも今すごく気持ちいいのだ。イきたい。もっと潰して擦ってほしい。
「あぁ……いいこだ」
反応を返すより早く、篠崎が腰を引いた。そして目がチカチカするほどの力でタマを潰され、潰された状態で擦られる。

「あああああああっ！」
「諒っ！」
痛みで自然と力が入った。まるで篠崎のペニスを止めるように内腿に力が籠る。
「っは、諒っ」
「あっ、あああっ！　ダメええっ！」
気持ちいい。タマが潰れそうなのに気持ちいい。タマの中、中心部がゴリゴリいっている気がする。
「あああああ！　だめぇっ！　だめえええええ！」
何がダメなのかも分からない。でも少なくともタマが壊れてしまうという意味のダメではない。
「諒っ、諒っ」
名前を呼ばれるのが嬉しい。篠崎は気持ちいいときにはたくさん呼んでくれるのだ。
「あっ、しのっ、しのざきっ」
「諒、イけるか」
「あっ、ああっ！　んっ、んっ！」
イきたい。もう頭の中は真っ白で快感を追うしかできそうにない。

５万４千文字です。
次で完結できたらいいな、と思っています（どうなることやら）
宜しくお願い致します。

ツイッター@gooneone11